

挨拶―日臨技の取り組み―

宮 島 喜 文 (一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 会長)

科学技術の進歩とともに、交通や通信手段が目覚ましく発展し、ヒト、モノ、情報が国を超えて頻繁に行き来する時代となり、グローバル化はますます進んでいます。

国際化を進める前提として、地域や人種、主義や宗教を超え、更には異文化を理解し合うことが必要ですが、現実の国際社会においてはこの論理が通じることなく、国家間や民族間の対立や地域紛争も絶えません。

そのような中、医療福祉の充実した先進国に生活し、かつ、平和を維持している国の国民の一人として、また、医療人として、私たちは臨床検査業務を通じて培った知的財産をいかに国際交流に活かすかを考えるべきです。

臨床検査領域で国際化が最も進んでいるのは臨床検査機器や試薬製造などの医療産業であります。わが国の高度成長期には国内市場が拡大し、国内で利益を挙げた時代もありましたが、その後の経済の低迷や発展途上国における医療需要の拡大に伴い、海外市場での売上・利益が中心となる大手企業も出ています。今後は、世界的な流通市場に企業戦略の焦点を合わせた研究・開発が加速していくと考えられます。

また、臨床検査部門の国際的な標準化として ISO、CAP などの品質保証制度を取得する施設も増加し、わが国の臨床検査室の技術水準や検査結果の信頼性が国際的に認められるようになってきました。これらの精度保証は検体検査のみではなく、臨床検査室全体の運営改善に繋がっていくことが重要であり、特に治験を行う施設においてはこれらの精度保証が求められています。今後は治験だけが目的でなく、市中病院等の臨床検査室においても、検査機器の管理や検査データの標準化と精度保証などについてグローバルな展開が期待されます。

これまでに本会が取り組んできた国際交流事業としての源は、昭和 36 年、シアトルで開催された第 29 回アメリカ医学検査技師会総会に当時の副会長が代表として派遣されたことに始まり、その後、海外留学した会員からの海外事情についての会報への投稿やオーストラリア、韓国、台湾とのメッセージの交換が記録されています。2 国間の交流だけでなく、世界的な交流の輪に加わるための入会手続きをとり、昭和 45

年、第 9 回国際医学検査技師会議 (IAMLT、現在の IFBLS) 総会において、本会の入会は認可され、翌年 4 月に加盟しました。そして昭和 59 年、第 16 回総会で当会の常務理事が評議員に当選し、昭和 63 年にわが国では初めて、第 18 回 IAMLT 学会総会が神戸市で開催されました。さらに、平成 24 年の第 30 回総会において本会会員が会長に就任し、平成 28 年の第 32 回学会総会を再び神戸市で開催することになりました。

また、アジア地域諸外国とより緊密な学術交流関係の構築を目的に、平成 9 年に名古屋においてアジア臨床検査技師会 (AAMLS) を創設し、当会会長が初代会長に就任し、平成 13 年に第 1 回 AAMLS 学会をクアラルンプールで開催しました。第 2 代会長にも本会会長が就任し、平成 21 年には第 3 回学会を横浜市で開催しました。

大韓臨床病理士協会との 2 国間の交流としては、昭和 47 年に本会副会長が韓国の学術大会に招かれたことから始まり、昭和 55 年には、大韓臨床病理士協会との間で、全国学会など学術活動を通じて両会の交流を深めることを目的にした日韓協定書を締結し、その後、日韓交流功労者会の設立や学生フォーラムを開催するなどして今日に至っています。

国際支援の面では、平成 2 年から JICA が発展途上国からの研修生を受け入れて実施する臨床検査技術研修事業にも参加し、協力しています。

これらの歴史的な経緯をふまえ、今後、新たに国際化を進める上で大切なことは、個人として私たち一人ひとりが世界を知るための経験を深めることです。また、組織としては、そうした個人の努力を支援し、“国際派”ともいえる臨床検査技師を増やすことです。

すなわち、臨床検査技師としての専門的な知識を有し、かつ、国際的に通用する見識と語学力を有する人材の育成です。そのために、本会を中心とした組織が行う国際交流活動に参画することを“第一歩”として活用していただきたいと願っています。

2016 年 IFBLS 世界医学検査学会 (神戸市開催) に向け、“国際化”に関する私たちの課題を、本日、この国際パネルディスカッションにおいて考えてみましょう。

臨床検査技師のグローバル化を考える

小松京子(一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 理事/IFBLS前会長/公益財団法人がん研究会有明病院臨床病理センター 技師長)

【はじめに】日本の臨床検査技師が海外で勤務したり、国際学会へ参加する機会は近年増加していると感じられる。語学の壁も学校教育の変化により、かなり低くなっている。多くの業界で国際化と言われる時代が進む中、英会話能力が高いことや海外経験=国際化という概念が存在しているように感じることもある。グローバル化とは地球規模で社会的な問題に取り組むことである。臨床検査技師として国際活動にはどのような機会があるのか、また、私自身が多くの国際活動を通して感じたことなどをお伝えしたい。会員の皆様が Global mind とは何かを考える機会となれば幸いである。

【International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS)】

IFBLS は国際臨床検査技師連盟と和訳できる。現在およそ 32 か国が加盟している。IFBLS は 1954 年に International Association of Medical Laboratory Technologists (IAMLT) の名称でスイスの Ms.Elizabeth Plescher が仲間達とともに立ち上げた。1955 年には最初の学会がイギリスで開催され、1964 年のスイスの学会で 2 年ごとの学会開催が決定された。1972 年に IFBLS は WHO の正式な関連 NPO 団体として承認され、それ以後、IFBLS の活動は WHO に報告している。IFBLS では副会長になると 2 年ごとに副会長→会長→前会長と STEP UP するシステムになっている。そのほか、5 名の理事と 1 名の事務員がおり、理事 5 名と副会長は学会時 (2 年ごと) に世界の代表者たちの選挙で選出される。2010 年のケニアの学会で私、小松は副会長に当選し、2012 年のドイツの学会にて会長に就任した。アジアからの IFBLS 会長は初めてである。2014 年の台湾で開催された第 31 回 IFBLS 学会にて会長を終了、前会長となった。台湾での国際学会参加者は 1230 名、日本から 70 名、韓国 60 名、ノルウエー 40 名、合計約 1400 名の参加者を迎え、盛況な学会となった。今回の選挙では理事には ENGLAND の EDWARD、INDIA の MANINDRA、CAMEROON の PATORIC、CROATIA の MIRJAN、ITALIA の ALBA が当選した。また、学生フォーラムは必ず行われており、台湾の学会では 2 名の学生を日本臨床衛生検査技師会が募集し費用をサポートした

が、公募する期間が短く指名に近いものであったこと、英語ができる人という条件での選択だったため、学生さん達も英語を話すことが目的となっていたように感じられた。大勢の学生さんが応募できるようなシステム作りと、学生さんに対して IFBLS に関する知識や、国際交流のありかたなどを伝えることが十分にできなかったことを反省点とし、更に発展させたいと感じた次第である。今回の第 32 回 IFBLS 学会は 2016 年 8 月 31 日から 9 月 4 日まで、神戸で開催される。大会長は日本臨床衛生検査技師会の現会長 宮島喜文氏、実行委員長は私小松である、多くの会員の皆様がご参加くださるようお願いする次第である。

現在の IFBLS は、認定試験を行うことやデータ標準化を行うことを目的としているのではなく、世界の臨床検査と臨床検査技師の情報交換・交流をメインとしている。臨床検査技師という職業の社会へのアピールのために BLS DAY の活用や学術集会による宣伝、WHO との連携業務の充実のためにできることを提案することが重要であると考えている。

【Asia Association of Medical Laboratory Science (AAMLS)】アジア 11 か国で連携している臨床検査技師学会も存在する。3 年ごとに学会が開催され参加は自由である。アジアの臨床検査技師教育精度は類似しており、各国英語は母国語ではなく、参加し易いと考える。国際学会等の情報や国際活動支援企画は、日本臨床衛生検査技師会のホームページに掲載される。定期的チェックをお勧めする。

【学術活動】多くの場合、学術活動は個人の熱意がすべてである。国際学会で発表のために英会話の訓練に励んだり、英文論文を書くために英語の参考文献を読むことは自身の向上にも繋がり、世界の状況を知る必要も出てくる。論文賞や学会賞は、参加者すべてが対象である。学術業績が目目され、講演などの機会を得ることもある。地道につみ重ねてきた自身の専門性が世界で評価されることは、大変幸せなことである。

【まとめ】会員の皆様が国際イベントに参加下されることが最も大きな力となる。今後とも国際活動をご支援下されることをお願いするとともに、皆様の益々のご発展を祈念する次第である。

連絡先 03-3520-0111 (PHS7869)

臨床検査技師制度の海外事情

坂本 秀 生 (神戸常盤大学 保健科学部 医療検査学科 教授)

日本の臨床検査技師は検体検査のみならず、生理学検査及び静脈採血まで行えるなど業務範囲が多い。世界に目を向けると、アメリカやカナダなどの北米、イギリスやドイツなどの欧州、シンガポールやフィリピンなどのアジアなど多くの国々では臨床検査とは検体検査および病理組織検査のみを指し、生理学検査や採血業務は別の資格者が行っている。

本発表では日本に馴染み深いアメリカを海外の臨床検査制度の例として取り上げ、違いを理解しながらグローバル化へのきっかけを掴んで頂ければ幸いです。

【アメリカの臨床検査技師制度】

アメリカでは各州に自治権があり、税率さえも異なる。車の免許証を初め、医師や薬剤師の医療職者の免許も州の規則に従っている。ただし何れかの州で免許を取得すれば、他州に引っ越した際でも書類の提出等で取得免許証をその州へ変更可能であるので、州発行の免許が国家免許の意味合いを持つ。

臨床検査技師業務に免許が必須なのは13州のみで、他州では政府から承認を受けた非営利団体の American Association for Clinical Pathology (ASCP)、American Medical Technologists (AMT)、American Association of Bioanalysts (AAB) いずれかの試験に合格し、臨床検査技師としての業務を行う。

【学生教育】

日本では臨床検査技師国家試験に合格すれば、取得学位に関係無く「臨床検査技師」である。一方、諸外国では、学位の種類により呼称と業務が異なる。

アメリカにて四年制大学卒業者は Technologist として複数検査と検査全体の管理も行い、より責任ある業務を行う。州試験がある州では「臨床検査技師」は四年制大学卒業者のみの場合もある。短期大学や専門学校卒業者は Technician として限られた検査のみ行う。ただし、ISO15189、CAP、JC、CLIA、AABB 等から認証を得た臨床検査室にて、規定の業務経験と勤務年数があれば、Technologist 資格の受験が可能となる。

臨床検査技師募集の際は「血液学検査」「輸血検査」「病理組織検査」等、業務別に募集される。これは卒業時点で明確な目的意識を持っていることに加え、学生時代から即戦力になれるよう、十分なトレーニングを積んでいるからでもある。

身内の話で恐縮だが、私の妻は在米時代に某大学教育病院の輸血部にて、臨床検査技師として働いていた。そこは日本の臨床地実習に該当する Clinical Training の実習病院でもあり、学生達の知識量と手技の見事さに毎年驚いていた。実習は病院のみならず研究所も含め、約1年かけて複数施設で行う。各施設の実習期間は数ヶ月で、その間に施設内の部署をローテーションする。これは合衆国政府の決めた臨床検査技師教育の基準に沿い、州試験や前述の ASCP 等の受験資格に規定時間以上が必須だからでもある。

【海外との交流】

ASCP では世界中の臨床検査従事者に対し、臨床検査専門家の国際的ゴールデンスターを設けようと、2007年より ASCP International (ASCPⁱ) を発足した。この制度により履修内容がアメリカと同水準と認められれば、ASCP の国際資格受験が可能となった。

試験問題は4つの選択肢から正解1つのみを選ぶ形式で、Technologist 資格で100問、Technician 資格では80問をコンピュータで解答する。難易度が問題毎に異なるので、それぞれ999スコアを満点とし400スコア以上で合格となる。2009年からは日本でも受験可能となり、合格者も複数いる。ASCP の国際資格は臨床検査分野を英語で修得するよいツールとなり、個人レベル行うグローバル化としても有効であろう。

受験可能な国際資格は2015年1月時点で以下である。
Technician 資格 : Medical Laboratory Technician, Phlebotomy Technician

Technologist 資格 : Medical Laboratory Scientist, Gynecologic Cytology, Hematology, Microbiology, Histotechnologist, Chemistry, Molecular Biology

ASCP が滞在費と研修費用を負担し、ASCP 国際資格の保持者に対し、本部のあるシカゴ及び近郊の病院を紹介し、本人の希望する分野で1~2週間の臨床検査室研修を計画している。通訳はつかないので英語コミュニケーション能力、往復の旅費負担は必要だが、アメリカでの病院研修に関心の有る方には、またとない機会となるのでは無いだろうか。

連絡先 〒653-0838 神戸市長田区大谷町2-6-2
電話 078-611-1821

JICAの経験と現状

橋本尚文(独立行政法人 国立国際医療研究センター 国際医療協力局 連携協力部 展開対策課)

昨今の日本の保健医療の流れとして外務省は2013年5月「国際保健外交戦略」を策定した。この中で世界各国が共通に直面する保健医療課題を外交の重要課題と位置付けユニバーサルヘルスカバレッジ「全ての人々が、基礎的な保健医療サービスを必要時に負担可能な費用で享受できる状態（WHOの定義）」への取組みを強化する方針を打ち出した。2013年6月に日本再興戦略が閣議決定され3つの政策が発表された。その1つとして民間投資を喚起する成長戦略がある。その中で重点である健康医療分野に関し2014年7月に「健康医療戦略」が策定され日本の医療技術や医療機器の積極的な海外展開、具体的には各国の実情やニーズを踏まえて日本の医薬品や医療機器や技術、医療体制などを官民一体で海外へ推進することが明言された。JICA（独立行政法人国際協力機構）とは政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関であり技術協力、有償及び無償資金協力等の援助方法を用い地域や国別の側面と課題別の対処方法を組み合わせ開発途上国が抱える課題解決を支援している。臨床検査分野でのJICAの国際貢献は青年海外協力隊事業、技術協力や無償資金援助と研修事業を通じ現在に至るまで長く途上国への協力を通じて行われてきた。JICAは技術協力事業において結核、マラリア、HIV/AIDSの3大感染症や寄生虫疾患等感染症を主とした疾病対策を実施してきた。その一環として臨床検査の質の強化や新技術の導入、医療人材 - 検査技師育成、輸血体制や検査ネットワーク強化、無償資金協力では病院検査室整備や結核中央検査室建設など臨床検査分野に多大な貢献をしてきた。更には途上国の臨床検査技師を日本に招き検査分野の技術研修を国内の検査技師会や病院や研究所の研修受け入れ先と連携し人材育成にも長らく貢献してきた。青年海外協力隊（JOCV）事業は途上国へ日本人ボランティアを派遣する制度である。JICAはこの事業を通じ過去25年以上途上国の検査室を中心に352名の臨床検査技師を臨床技師隊員として派遣し2014年11月時点で4名が派遣中である。同様に検査技師の資格を持つ隊員を派遣職種が技師職でないが保健関連職種であるエイズやポリオ対策や公衆衛生等の職種で途上国の保健医療の現場に派遣してきた。JICAはこの事業を通じ途上国の保健医療に貢献し同時に国際保健分野や医療機関や企業で働く日本

人技師の人材育成に間断なく寄与してきた。JICAが保健医療分野で重視する観点は1) 国際保健潮流を踏まえた事業の戦略的強化、2) 被援助国の国家保健計画に沿った中長期的協力の推進と援助強調への合致、3) 途上国の課題対処能力支援、4) 実証的根拠の活用と創出、5) 日本の健康医療産業や技術力を生かした貢献の5つである。分野的には保健体制強化、保健サービス（予防接種、検診、検査、治療）の質の向上並びに日本の民間企業と連携した保健医療への貢献である。臨床検査分野では検査治療のための体制強化、検査室ネットワーク強化が挙げられている。翻って日本臨床衛生検査技師会（日臨技）は、自身の国際化に関し2013年3月に答申書「臨床検査技師の未来構想」の中で言及した。その中で社会に貢献する人材の育成が基本理念の1つとして明記され国際的な役割を果たす必要性と進むべき方向として途上国の臨床検査への支援が明言された。2014年3月に提出された日臨技第4次マスタープランに戦略目標の1つとして社会貢献の面から国際支援・交流と国際的に対応できる人材育成に尽力することが明記され平成26年度事業計画では海外の関連学会との学術交流進展と途上国への支援の検討が記された。上記の潮流の中で臨床検査技師は業界として戦略的に政府やJICAの方針の下、限られた資源の中で選択と集中を行いながら日臨技の方向性に沿った国際協力が求められている。具体的には国家中央検査室設立・強化から上位から下位病院検査室精度管理強化を通じた体系的な検査の質の向上、結果の電子化、検査室の標準化、三大感染症や鳥インフルエンザやエボラ出血熱等新興再興感染症対策や生活習慣病対策における検査体制強化など途上国の現在と今後のニーズに即し積極的な国際支援や交流が求められおり同時にそのための人材育成も急がれる。今後、臨床検査分野でJICAが日臨技と戦略的に協力関係を維持強化しつつ途上国への支援を通じた国際貢献の継続が望まれる。更に日本の再興成長戦略への協力の観点から協力隊事業や隊員経験技師及び日臨技の戦略的な活用と検査分野関連学会や諸団体との有機的連携が期待される。

連絡先 03-3202-7181（内 2735）

国際学会に参加して

菊 地 良 介 (名古屋大学医学部附属病院 医療技術部臨床検査部門)

【はじめに】2007年、名古屋大学医学部附属病院医療技術部臨床検査部門に入職後、虚血性心疾患および血管病における新規検査項目の探索研究を行ってきた。日常業務後に社会人大学院生として循環器内科学講座で、薬剤による血管新生調節機序解明 (Kikuchi R. et al., Lab. Invest. 2011) の研究を行い、American Heart Association (AHA: 米国心臓学会) 2008で研究成果を発表した。その後、ポスドクとしてボストン大学へ留学し、VEGF-A165bが末梢動脈閉塞性疾患 (PAD) において病態進展に重要な役割があることを見出し (Kikuchi R. et al., Nat. Med. 2014)、4th Congress of the Asia Association of Medical Laboratory Scientists 2013 (AAMLS: アジア医学検査学会) および 31th World Congress of Biomedical Laboratory Science 2014 (IFBLS: 世界医学検査学会) にて、その研究成果を発表してきた。

本シンポジウムでは、計3回の国際学会での発表経験から得た「国際学会に必要なもの」、「国際学会から得られるもの」等について紹介する。

【国際学会への参加】1) AHA2008: 英語を話せる話せない以前の散々な発表であった。研究内容に自信はあったものの、聴講者への配慮に欠けていたことを今でも覚えている。研究内容をいかに相手の興味を引けるようにプレゼンテーションできるかが大切だと感じた。2) 4th AAMLS: 米国ボストン大学留学時から研究してきた“臨床検査結果とPADの病態進行度における矛盾点にVEGF-A165bが関与する”ことについて発表し、諸外国の臨床検査業務に従事する方々と間近で研究内容について議論することができた。また、本学会には日本から13名が参加しており、同じ志をもつ臨床検査技師が日本には沢山いることを知るとともに、日本臨床衛生検査技師会が国際舞台で活動していることを肌で感じることもできた。3) 31th IFBLS: 本学会では4th AAMLSで発表した、VEGF-A165bが肥満関連疾患においても関与していることを追加報告した。また、2016年神戸でIFBLSの開催が決定されていることから、日本臨床衛生検査技師会代表視察団の一員として、学会企画のひとつである“Student Forum”にも参加した。

【国際学会に参加して思うこと】

1) コミュニケーション・プレゼンテーション能力向上の必要性: ボストンに留学した最初の数ヶ月で、英語力の乏しさ以上に圧倒的なプレゼンテーション力の違いを痛感した。コミュニケーション・プレゼンテーション能力がなければいかに素晴らしい仕事をしていても評価されない現実があった。また、国際学会の経験からも、コミュニケーション・プレゼンテーション能力向上の必要性を実感した。英語は文法通り話せる必要はないと思う。文法通り英語を話す人の方がむしろ珍しく、発表内容がしっかりしていれば、発表中はスライドが聴衆に語ってくれると思う。日本の演題内容のレベルはどれも高いので、“伝える能力”の向上次第でますます発展できると思う。2) 各国の医療背景を考慮した検査業務内容および研究発表の有用性: 発表内容に関しては先駆的な研究はもとより、それぞれの国の医療背景を反映した臨床検査業務内容および研究を紹介することはとても重要な点であると思う。先天性疾患、感染症が多い国では、遺伝子検査および微生物検査への取り組み方と研究内容も違う。他国との情報交換をより有意義にするためにも、国内の様々な取り組みを発表することはとても意義のあることだと思う。3) 国際学会で得られるもの: 質疑応答や懇親会で同じ臨床検査に携わる国外の知り合いが増えることに加え、日本からの目的意識を共有できる仲間との交流や、空き時間を利用した異文化交流などは、苦勞して得た研究成果に見合うかそれ以上の価値がある。また、開催国の病院見学が日程に組み込まれているのも醍醐味の一つである。

【まとめ】国際学会に参加し、他国の医療環境には大きな差があることを肌で感じる事が出来た。

その一方で、医療環境が急速に整備されている国も多く、日本の臨床検査技術、検査環境が本当にトップクラスであるとも言いがたい。しかし、日本は常に国際社会においてリーダーシップをとっていくべきであると思う。そのためにも多くの臨床検査技師が現状を把握し行動できるよう、国際学会に参加できる環境整備は必要であると考えます。

連絡先 052-744-2588

ポスドクリサーチフェローとして米国USC&CHLA留学の経験から

大 楠 清 文(東京医科大学 微生物学分野 教授)

私は東京医科歯科大学医学部附属臨床検査技師学校を卒業後、虎の門病院臨床化学検査部、千葉県こども病院にて臨床検査技師として勤務した後、専門分野の更なる研鑽を目的に米国留学を経験した。すなわち、遺伝子学的診断法の修得と米国の臨床微生物検査体制を学びたいという強い意志と熱意をもち、公務員職を辞して単身で2001年7月から約2年半の間、ポスドク研究者としてロサンゼルスにある南カリフォルニア大学(USC)とロサンゼルス小児病院(CHLA)に留学した。当時は(当時も)、我が国の臨床検査技師が留学先の大学から給与(年間約3万ドル)を支給されながら海外留学するケースはきわめて稀であったと思われる。給与を支給して貰うために、留学に先だって、博士号の取得が必要条件となった。千葉県こども病院で勤務のかたわら、それまでの約7年間に執筆した幾つかの論文をもとにして、杏林大学大学院で保健学博士号を授与してもらい、留学が現実のものとなった。

留学期間中も常に「臨床」を意識して、最新遺伝子解析技術と臨床の視点をリンクした研究を実践した。具体的には、① HIV陽性の播種性 *Mycobacterium avium* complex (MAC) 感染患者のコロニゼーションと感染の関係に関する研究、② インフルエンザ菌性髄膜炎患児から同時に分離された a 型株(髄液)と無莢膜株(血液)の分子生物学的解析、③ アデノウイルス感染症の PCR 法による迅速診断および real-time PCR 法による定量法の確立などである。ロサンゼルス小児病院(CHLA)の臨床微生物検査室にも出入りして、米国の検査制度を学ぶ機会を得た。また、臨床微生物検査と研究室との橋渡しとしての分子疫学的な解析を通して、臨床医や疫学者との交流を持つこともできた。

帰国後、岐阜大学医学部の江崎教授のもとで、助教、准教授として約10年間お世話になった。この間、細菌の系統分類と分子進化の研究に研鑽を積みながら、臨床微生物検査の現場で培った経験と米国で修得した技術を融合させ、感染症患者検体からの迅速遺伝子診断法を確立した。学会や研究会を通じこのことが広く知られるようになり、全国の病院・医療施設で感染症が強く疑われるにも関わらず診断がつかない検体や、日常の技術で同定できない菌株が多数届けられるようになった。医学部生への微生物学や感染症学の教育に

従事しながら、これらの検体について遺伝子学的技術を駆使し、患者さんのためにという気持ちを注ぎながら迅速に解析して報告し、感染症診療に関するコンサルテーションにも誠心誠意対応してきた。

そして、これまでの業績や活動を評価して頂き、昨年4月に東京医科大学微生物学分野に教授とし着任した。医学部生への微生物学や感染症学の講義や実習指導のほか、大学病院の感染制御チーム(ICT)ではインфекションコントロールドクター(ICD)として臨床微生物検査と診断の視点から感染症診療や感染制御の仕事にも従事している。さらに、これまでと同様に全国の病院・医療施設から依頼される臨床検体や菌株の解析を通じて、我が国の感染症診療に微力ながら貢献しているとの矜持を持っている。これまでに解析した臨床検体は約1,100件、同定菌株は1,600件を超えた。これらの解析データがベースとなり、医師や臨床検査技師の学会発表のサポートも行っている。とりわけ、全国の指導者がいない病院の技師や医師のために検討や研究の進め方をアドバイスして、学会発表や論文執筆・投稿にも対応している。

こうしたなか、おもに臨床微生物検査や感染症の遺伝子検査に関する招待講演や学会のシンポジストなど年間30回ほどの機会を与えて貰っている。全国各地の臨床微生物検査技師や医師との交流を深めるなか、講演後の「飲みニケーション」は何よりの楽しみである。ひいてはこの人と人との繋がりが感染症診断に挑むモチベーションの原動力となっている。

その他、感染症の遺伝子検査に関する著書や総説の執筆、ハリソン内科学書やブラック微生物学など欧米の教科書の翻訳執筆も担当している。この数年来は、日本臨床微生物学会の国際委員からの派遣でCLSI会議やISO会議に出席して、欧米の最新情報を報告・紹介する機会も増えた。これらは、やはり米国留学で多少なりとも改善された(身についたとは言えない)英語力や英語によるコミュニケーションの「開き直り」が次へのチャレンジに役立っていると思われる。

以上のような臨床検査技師学校卒業から現在までの約28年間、私のこれまでの人生に大きな影響を受けた「3師匠」との出逢いを振り返りながら、米国留学の経験を短い時間ではあるがご紹介したい。